

大阪-ハンブルク友好都市提携35周年記念 アーティスト派遣プログラム 報告書

派遣期間 2025年8月21日～10月20日（2ヶ月間）

実施場所 Hyper Cultural Passenger (HyCP)e.V.
Sieldeich 36 20539 Hamburg Germany

主 催 一般社団法人日本現代美術振興協会
共 催 ハンブルク文化メディア省
助 成 ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川
協 力 Hyper Cultural Passenger、Mikiko Sato Gallery

参加アーティスト 国本真絵

作成者：一般社団法人日本現代美術振興協会

作成日：2026年1月20日

1.事業概要

目的

大阪市一ハンブルク市友好都市提携35周年を記念し、2024年7月に開催された第22回現代美術のアートフェア「ART OSAKA 2024」において、国際的に活躍するハンブルク在住のアーティスト3名を招聘し、展覧会「すべては水であらわれる」を開催した。

本事業は、その相互プログラムとして、公募によるアーティスト・イン・レジデンスを実施したものである。

本レジデンスプログラムでは、大阪にゆかりのある現代美術作家に対し、ハンブルク市内のアートスペースにおける滞在制作の機会を提供した。異なる文化的・社会的文脈のもとでのリサーチおよび制作を通じて、作家のキャリア形成を支援するとともに、現代美術を媒介とした日独間の継続的な交流機会の創出を目的とした。

行程

上記の目的のもと、本事業は以下の工程に沿って実施した。

— 記念展覧会 (参考) —

2024年

7月19日～22日 「すべては水であらわれる」開催

会場：ART OSAKA 2024 Expandedセクション会場内 kagoo 3階

— アーティスト派遣プログラム —

9月2日 アーティスト派遣プログラム 公募要項公開

16日(月)～20日(金) 申し込み受付期間

10月17日 オンライン審査会 実施・派遣アーティスト決定

11月18日 審査結果 公開

12月18日 レジデンス施設ディレクター、派遣アーティスト オンライン会議 1回目

2025年

2月14日 レジデンス施設ディレクター、派遣アーティスト オンライン会議 2回目
～その後、施設側とアーティストで直接やり取りを行う

7月31日 アーティストと弊社事務局による最終オンライン会議

8月21日～10月20日 派遣アーティストのハンブルク滞在制作

10月8日～19日 現地での展覧会「Fill in The Blank – Mae Kunimoto」

12月18日 帰国後 報告会の実施

2. 公募について

下記の公募要項に基づき、公募および選考を実施した。

◆応募期間：2024年9月16日(月)～20日(金)23:59

◆応募資格

- ・「ART OSAKA 2016」以降に出展したギャラリーによる推薦
- ・2025年3月31日時点で45歳以下の現代美術作家
- ・大阪にゆかりのある作家(大阪出身、大阪を拠点、大阪の大学卒業、大阪にゆかりのある作品を制作している、ART OSAKAに出展したことがある等)
- ・学部卒業以上(派遣日時点で修了していれば可)、国籍不問
- ・ハングルク滞在期間中に展示 or オープンスタジオをすること
- ・帰国後に報告会の実施(2026年3月末まで)をすること

◆応募の必要書類

1. ポートフォリオ (A4 15枚以内)
2. 所定のアプリケーション(A4 5枚程度)

- ・英語やドイツ語の語学力
- ・志望動機、モチベーションレター、レジデンスプログラムの経験を今後にどう活かすかなど
- ・現地での活動計画

[審査の流れ]

提出された資料をもとに書類審査を実施。

オンライン審査会：10月17日(木) 18:00～

◆審査員：3名

大下裕司 氏 / 大阪中之島美術館 学芸員

エンツィオ・ヴェツツエル 氏 / ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川 館長

Michael Kress 氏 / Hyper Cultural Passenger ディレクター

◆アドバイザー：3名

佐藤幹子氏 / Mikiko Sato Gallery (ハングルク在住)

Julia Dautel 氏 / ハングルク文化メディア省 課長

加藤義夫氏 / 宝塚市立文化芸術センター 館長 (APCA理事)

[応募・選考の結果]

公募の結果、11名の応募があり、書類審査を経て5名をオンライン面接の対象とした。

その後、厳正な審査を経て、国本真絵氏を派遣対象アーティストとして選出した。

◆ 審査員コメント ◆

大下裕司 氏 / 大阪中之島美術館 学芸員

いずれの応募作品も、各作家の得意とする制作方法を活かした提案だったと思います。それぞれのスタイルやコンセプトに基づいた滞在プランはどれも素晴らしい、選考は非常に難しいものでした。アーティスト・イン・レジデンスは、その土地に滞在することで場所や人に触れて学び、新たな観点を作品に生むプログラムという面もあります。ハンブルクに滞在すること自体が目的にならずに、滞在で何を得て、そして作家自身あるいは作品にとって何かの契機になることを予感させるプランが最終選考に進みました。

プレゼンテーションでは語学力も問われながらも、積極的に「自分のしたいこと」をはっきりと示した二名のアーティストに票が集まりました。人と人とのコミュニケーションは能力によるところもありますが、当然ながら気持ちや熱量も問われてきます。どの作家のプランも非常に洗練されていましたが、最後は実現可能性だけでなくハンブルクで地域や人と関わり、どのように作品や作家自身を「変化」させるかを期待させるプランが選ばれました。よい滞在になることを願っています。

Enzio Wetzel 氏 / ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川 館長

いくつかの作品に見られる、詩的で、やや曖昧さを含んだ表現のスタイルに深い印象を受けました。作家は、暗示やささやかな手がかりに満足し、陽気で屈託のない行為に時間を費やしています。強く主張するような、劇的で過度に明確なメッセージがほとんど存在しない点も印象的でしたが、それによって作品の声が弱まっているわけではありません。むしろ、すべてにおいて、芸術的にも技術的にも明確で強いバランス感覚が貫かれていることを非常に魅力的に感じました。そして、最も重要な点として、参加したすべての人が「ハンブルクの人々と何かを共にしたい」と考えていたことが挙げられます。他者と共に動き出すこと自体が、彼らの芸術的コンセプトの真の一部となっていました。

もし今回でなくとも、また別の機会に、ぜひすべての人にハンブルクを訪れてほしいと願っています。

*Chat GPTにて翻訳

Michael Kress 氏 / Hyper Cultural Passenger ディレクター

大阪のアーティストを対象としたハンブルク奨学金の第1回選考は、日本の文化都市・大阪のアートシーンを巡る、非常に濃密な旅となりました。応募されたすべての作品は、独自性に富み、強度のある創造性を備えていました。アーティストたちの作品の質は一貫して非常に高く、大阪のアートシーンがいかに多様で、活気に満ちているかを如実に示していました。

使用されるメディアや技法はさまざまである一方、すべての作品に共通していたのは、現代という時代のテーマに対する集中的かつ真摯な探究姿勢です。こうした芸術的アプローチは、ハンブルクと大阪の間における芸術交流に新たな刺激をもたらしました。現代美術と文化は、その担い手によって支えられており、持続的な文化支援こそが、こうした重要な活動を可能にします。

審査員の一人として、選考は決して容易ではありませんでした。応募されたすべての素晴らしいアーティストが、この新たな奨学金にふさわしい存在だったからです。

本年度のアーティスト・イン・レジデンスを心より楽しみにしており、大阪のアーティストおよびアートシーンとの長期的な協働関係が築かれることを願っています。

*Chat GPTにて翻訳

派遣アーティストについて

国本真絵 / Kunimoto Mae

[経歴] 1996 大阪生まれ

2021 大阪芸術大学工芸学科

金属工芸コース卒業

[主な展覧会]

2024 個展「CHILDHOOD」gekilin. / 大阪

グループ展「OSAKA DOPE!」渋谷ヒカリエ / 東京

2023 個展「OUTLINE」gekilin. / 大阪

[作家ステートメント]

物事を理解しようとするとき、私達は周囲の環境や多量の情報から要素を拾いながら相対的に判断しています。情報の取捨選択には先入観や印象が介入してしまい、輪郭を歪めてしまうこともあるでしょう。できるだけその輪郭を正確に認識するためには、丁寧な観察を連続させることが重要なのではないかと考えます。

手を加えた分だけが如実に形に表れる金属素材を用いて、輪郭を丁寧に選択することを試みています。



(左) 'Game' H900 W900 D630 / 真鍮、洋白、銅、アルミ、木、ターフパウダー / 2024



(右) 'Interaction' H1550 W1000 D1500 / アルミニウム、銅、真鍮、錫 / 2024

プログラム概要について

滞在期間： 2025年 8月21日～10月20日（約2ヶ月間）

滞在施設： Hyper Cultural Passenger (HyCP)e.V. (www.hycp.org)

支援内容：

- アーティスト・イン・レジデンス用スタジオおよび滞在環境の提供
- 往復エコノミー空港券（原則：関西国際空港 ⇄ ハンブルク空港、実費：上限25万円）
- 制作滞在費として50万円を事前支給
- 現地アーティストおよびキュレーターとの交流機会の提供、制作活動に関する支援

3. ハンブルクでの活動について

派遣アーティストは、2025年8月21日から10月20日までの約2か月間、ハンブルク市内のレジデンス施設を拠点に滞在制作を行った。滞在期間中は、ワークショップを中心に、現地の子どもたちや地域住民を対象とした交流活動を多数実施した。これらの活動は、地域との接点を重視した本レジデンスの趣旨を具体的に体現するものとなった。

現地の人々との直接的な関わりを通じて、作家は制作に新たな視点を得るとともに、今後の活動へつながる実践的な経験を蓄積する機会となった。

滞在期間中の活動記録

8月21日：ドイツ・ハンブルク 到着 Hyper Cultural Passengers(以下HyCP)での滞在スタート

8月25日-8月29日：“Veddel Art Camp”

地域の子どもたちとのワークショップ「アコーディオンブックの制作」

8月31日-9月2日：オランダ・フローニンゲン 文化施設の視察

9月12日-9月13日：“Veddel Festival”

アコーディオンブックの展示 会場：HyCP

9月19日：ウーマンズフェスティバル

地域の女性たちとワークショップ「クッキー型の制作」 会場：Café nova

10月1日：“Veddel Soul Kitchen”

ワークショップ“SOUP of the DAY”うどんスープ作り 会場：Café nova

10月8日-10月18日：Exhibition “FILL IN THE BLANK” 会場：HyCP

(10月12日 トークイベント開催)

*活動の詳細は、派遣アーティスト国本氏による報告書をご参照ください。

ワークショップの記録

画像提供：国本氏

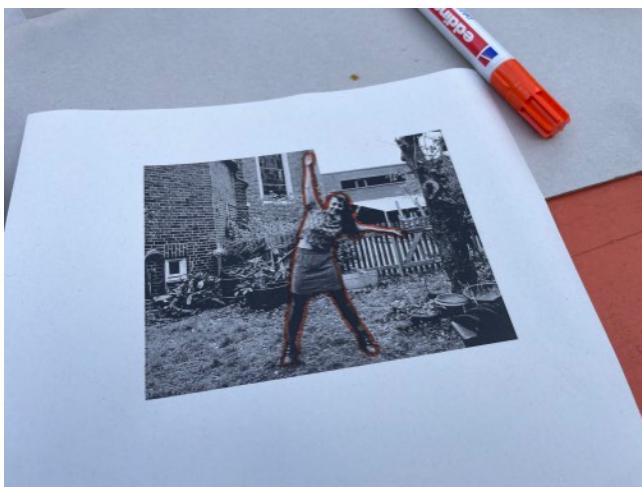
■Veddel Art Camp：アコーディオンブックの制作



■Veddel Festival：展示の様子



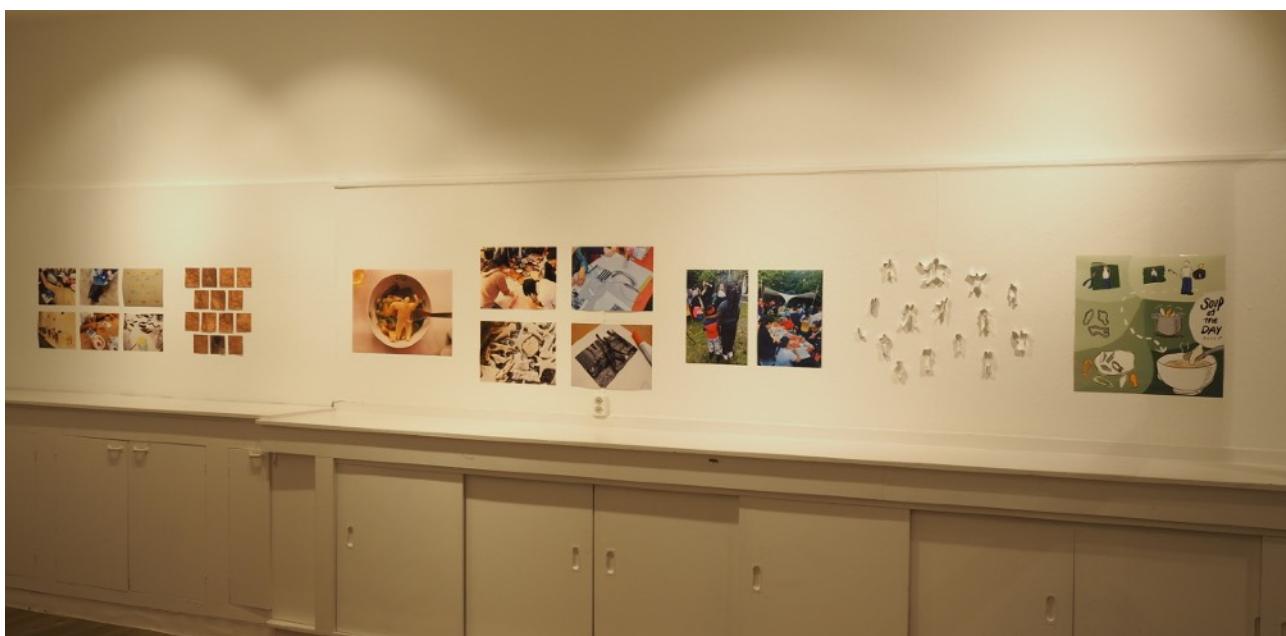
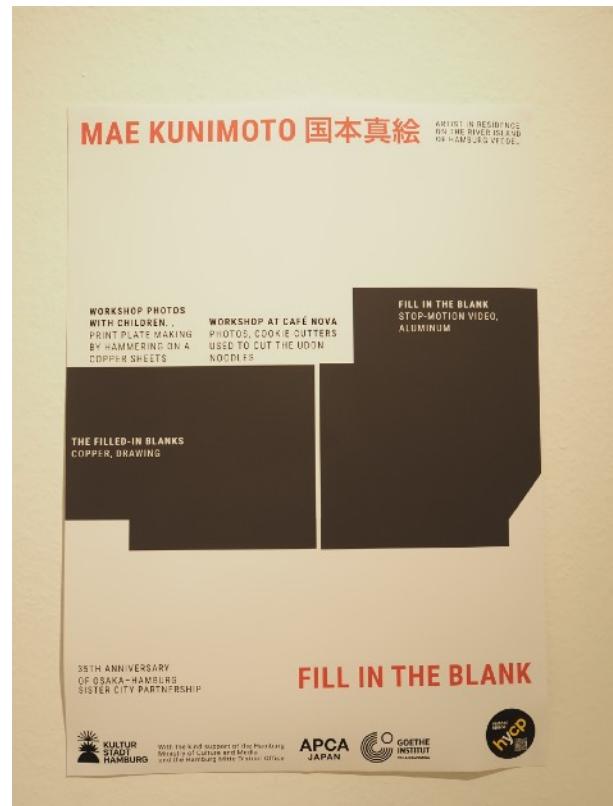
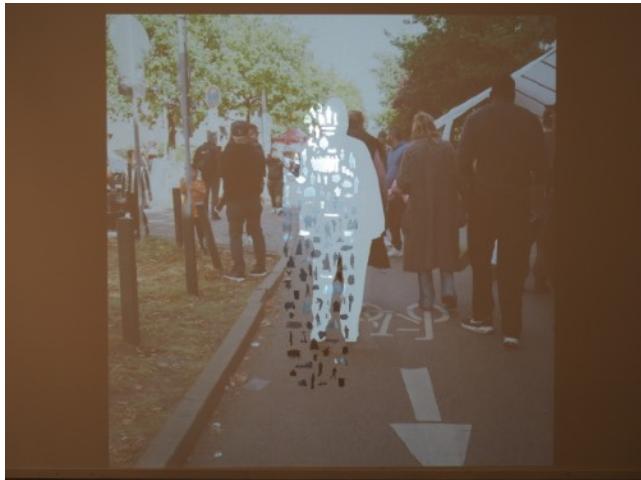
■ ウーマンズフェスティバル：クッキー型の制作



■Veddel Soul Kitchen：ワークショップ“SOUP of the DAY”うどんスープ作り



■Exhibition “FILL IN THE BLANK”



■ トークイベント

画像提供：MIKIKO SATO



4. 報告会の実施について

派遣事業の成果を広く共有することを目的として、国本氏の帰国後に報告会を実施した。

国本氏からは、本プログラムに応募した経緯に始まり、滞在期間中に実施したワークショップの内容について報告が行われた。ものづくりや食を媒介とした地域の子どもや住民との交流の様子が紹介され、アーティストならではの視点から、現地での作品制作にどのように反映されたかが具体的に示された。

さらに、現地で視察した文化施設やアートスペースの運営形態を踏まえつつ、ヨーロッパと日本における文化事業の在り方や支援体制の違いについての考察が示された。こうした視点は、参加者にとっても大阪の文化事業を捉え直す契機となった。

報告会終了後には交流会を実施し、少人数ながらも参加者と派遣アーティストが直接対話できる、有意義な機会となった。

大阪-ハンブルク友好都市提携35周年記念 アーティスト派遣プログラム 報告会

○開催概要

日 程：2025年12月18日(木)

時 間：19:00～20:30 (15分前 開場・受付)

参加費：無料。1ドリンク制

会 場：HONJO FACTOR [大阪市北区本庄東1-25-13] <https://www.honjofactor.com/>

会場協力：gekilin.飯野マサリ

報告者：国本真絵 (派遣アーティスト)

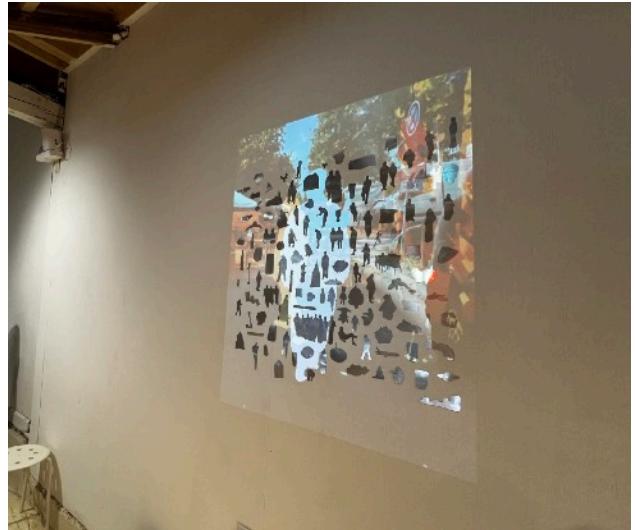
進 行：室谷智子 (ART OSAKA 事務局)

- ・ART OSAKA 2024大阪・ハンブルク友好都市35周年記念展「すべては水であらわれる」の紹介
- ・派遣アーティスト国本氏によるハンブルク滞在の報告
- ・質疑応答など

○参加者の感想まとめ [参加者：17名]

参加者からは、国本さんのハンブルク滞在中の活動や、現地の環境・人々との関わりの中で作品が立ち上がりていくプロセスがよく伝わったという声が多く寄せられた。特に、地域に根差したワークショップや、滞在中の経験やハプニングを作品へと昇華する姿勢に強い印象を受けたという意見が見られた。また、ヨーロッパと大阪におけるアートや文化の土壤の違い、作家選定や審査の背景についても学びがあったとの感想があり、文化交流を通じて共通点と相違点を見つめ直す貴重な機会になったと評価された。報告会に加えて交流会が設けられた点についても、参加者同士が直接意見を交わすことのできる有意義な場であったとの声があった。

▼報告会の様子



▼交流会の様子



5. 成果・課題

公募について

本事業の公募は、大阪にゆかりのある作家であること、また、ART OSAKA に出展歴のあるギャラリーからの推薦を必須条件としたため、応募要件としては間口の限られたものとなった。その結果、応募者数は10名程度と多くはなかったものの、いずれの応募者も一定のキャリアと実績を有する作家であり、質の高い応募が集まった点は特筆すべきである。そのため、選考においては甲乙つけがたい状況となり、慎重な判断が求められた。

応募資格の年齢条件については、大学学部卒業相当以上から45歳以下までと幅を持たせて設定したが、受け入れ先の特性や現地で想定される活動内容を踏まえると、今後は年齢幅をある程度絞ることも検討の余地があると感じられた。

また、書類審査に加えてオンライン面接を実施したことで、提出書類だけでは把握しきれない滞在プランの具体性や、現地でのコミュニケーションに必要な英語力、レジデンスに対する意欲や姿勢を直接確認することができた点は、有意義であった。

レジデンスについて

受け入れ先である HyCP からは、オランダへの視察や地域住民との継続的かつ密度の高い交流機会など、非常に充実したレジデンスプログラムが提供された。本事業における国本氏の派遣は、受け入れ環境との相性も含め、極めて適切であったと評価できる。

国本氏の高いバイタリティーと、HyCP が用意した開かれた交流環境が相互に作用し、芸術（ものづくり）を媒介とした文化交流が促進された。通常は地域住民の来訪が限られている HyCPにおいても、国本氏のワークショップおよび展覧会をきっかけに、作品鑑賞を目的として施設を訪れる住民が見られ、受け入れ施設にあって新たな地域との接点を生み出す契機となった。

一方で、金属工芸作家である国本氏にとって、異国の地での材料や道具の調達、制作環境への適応には少なからず困難も伴った。しかし、ワークショップや地域の祭りなどに積極的に参加し、他者や文化的背景の違いを受け入れながら、それらを制作へと昇華させていく姿勢は、芸術制作において不可欠なプロセスであり、本レジデンスを通じてより明確に意識化されたように見受けられる。

滞在の成果として発表された映像作品《Fill in the blank》は、国本氏にとって初めての映像表現への取り組みである。写真に写された自身のアイデンティティーをあえて抽象化し、白いシルエットと輪郭のみを残す構成が特徴的である。鑑賞者は、そのシルエットを日本人、ドイツ人、あるいは別の存在として捉えるのかを無意識のうちに問い直され、自身の認識やアイデンティティーに気づかされる作品となっている。

ステートメントにおいて一貫して提示してきた「輪郭」への関心を、新たなメディアと手法によって展開した点は、国本氏自身にとって大きな成果であり、本レジデンスが創作の幅を拡張する契機となったことがうかがえる。

継続していくために

本事業は、大阪・ハンブルク友好都市35周年記念事業として実施されたものであり、その意義は大きい一方、節目の年に限定されてしまう点は今後の課題である。

継続的な国際交流プログラムとして発展させていくためには、安定した資金調達の仕組みが不可欠である。今回は、ゲーテ・インスティトゥート鶴川およびハンブルク文化メディア省からの支援・協力により実現したが、今後は大阪市をはじめとする行政機関や民間企業の参画を得ていく必要がある。そのためには、本事業が都市にもたらす文化的・社会的価値や波及効果を、具体的な成果をもとに示していくことが求められる。

また、本事業は単発の派遣にとどまらず、日本とハンブルク双方においてアーティストを相互に紹介し、関係性を継続的に育む「交流のハブ」として機能させていくことを目指したい。今回の実施を通じて、アーティストの滞在制作が受け入れ施設や地域に具体的な影響をもたらすことが確認され、受け入れ機関との信頼関係や運営を通じて得られた知見も蓄積された。こうした成果やネットワークを個々の派遣にとどめるのではなく、次の交流へと接続していくためにも、今後は事業を継続的に展開するための仕組みについて模索していきたい。